
スポーツサイエンスコースにおける実践的学びの場の検討 ～学生と教員との協働による実習プログラムの具体的検討とシラバスの作成～

研究代表者	村田 健三郎(政策学部)
共同研究者	長谷川 裕(経営学部)
	松永 敬子(経営学部)
	佐々木 浩雄(文学部)
	松畑 尚子(法学部)
	鈴木 啓央(経済学部)

1. プロジェクトの目的

本プロジェクトは、「スポーツサイエンスコースにおける実践的学びの場の検討～スポーツ実践・実習系科目設置の可能性と実施方法について～」のテーマを掲げ、教育を担う側とともに教育を受ける側の視点を重視した具体的な実習プログラムを確定し、シラバスを作成することを目的としたものである。

スポーツサイエンスコースでは、スポーツ諸事象に関する自然科学系および人文・社会科学系の科目を提供している。このうち自然科学系の科目では理論的な学習とともに測定や実験など実践的な学びの場を含む授業展開がある程度確立している。他方、人文・社会科学系では、座学を中心とする学習の比率が高い状況から、実践的な学びの場すなわち Project based learning (PBL) としての科目開設が可能となれば、教育効果を高めることが期待できる。この観点から、2017年度には、FD 研究開発プロジェクト「スポーツサイエンスコースにおける実践的学びの場の検討～スポーツ実践・実習系科目設置の可能性と実施方法について～」において、生涯スポーツの指導・実践場面を想定し、実際にレジャースポーツを体験することを通じてスポーツの多様な楽しみ方を知り、運営・指導の実際やリスクマネジメントについて学習する「レジャースポーツ実習(仮)」の設置について検討した。

本プロジェクトは、2017年度のプロジェクトによる検討結果を踏まえながら、教員および学生が共に体験する活動を通して何を学び、何を感じるのか、他の科目との接合や事前・事後指導のあり方をどのように考えればよいかなど実習の効果やカリキュラム上の位置づけを考慮した上で、PBL 科目として開設する場合のシラバス案について検討することを目的とした。

2. 体験活動について

本プロジェクトでは、PBL 科目として開設する場合のシラバス案を作成する参考のため、2018年8月26日～28日(学生は27～28日)の間に YMCA 阿南国際海洋センター(徳島県阿南市椿町那波江)にて、教員4名と学生5名が体験活動を行なった。

この活動での目的は、以下の4点であった。

- ① 施設設備と実習内容の把握
- ② 現地スタッフの活動内容把握
- ③ 実習を行う上でのリスクマネジメント
- ④ 参加学生の体験活動を通じた意識調査
- ⑤ 科目を開設する場合の要件

3. 体験活動を通じた結果（概要）

① YMCA 阿南国際海洋センター（以下、センターという。）の施設設備と実習内容の把握

1) 1968年に開設されたセンターのコンセプト

コンセプトは、ヨット・カッター・カヌー・カヤック・ボードセーリングなどの操船をキャンパー自らの手で行う経験を通して、海の自然を感じ、考え工夫し、決断をし、勇気を出して行動することを学びシーマンシップの育成を目指すこととされている。

2) センターの施設設備

施設設備は、事務所、本館（食堂、レクチャーホール）、宿泊施設 20 棟、ファミリー棟 6 室、水上スポーツ用具（カヤック、カナディアンカヌー、ジャンボ・カヌー、カッター、ヨット、ウィンドサーフィン）、プール、キャンプ施設などが備わっている。また、募金により献島された野々島（無人島：観光やキャンプが可能）がある。



写真 1. センター見取り図



写真 2. 事務所



写真 3. 本館



写真 4. 宿泊棟例とプール



写真 5. マリンスポーツ用具（カヤック・スタンドアップパドルボード・ヨット）の例

3) 実習内容の把握

現地での実習は、海洋プログラムとしてカヤック、サップ（スタンドアップパドルボード）、カナディアンカヌー、ヨット、ウィンドサーフィンの基本練習に加え、応用編として施設内の内海周回や野々島へのツアーなどが準備されていた。

基本練習前には、バディーを組み、安全面やコミュニケーションや助け合いの心構えについて学ぶことが必須として設定されていた。また、ヨットについては、帆の組み立てとともにローピング（ボウライン、クラブヒッチ、ダブルオーバーハンドノット、ラウ

ンドターンツーハーフヒッチなど)が必須となっていた。

これら実習の内容や日程については、参加団体代表者と現地スタッフとの事前打ち合わせによって決定される仕組みとなっていた。

なお、実習の参加は、小・中・高校宿泊型体験学習、大学・専門学校の野外活動実習、幼稚園・保育園などのお泊まり保育、インタナショナルスクールチャレンジキャンプ、シニアグループやインバウンドツアーなど、利用者のニーズに応じて対応できるようになっていた。センター利用団体等については、付録を参照のこと。

② 現地スタッフの活動内容把握

1) 実習における体制等

(1) スタッフ

スタッフは、専任スタッフ（和田氏）と学生ボランティア・スタッフ（上西氏〈大阪国際大学生〉）により編成され、実習の指導、助言を行い、かつ危機管理も行なっていた。

学生ボランティア・スタッフは、夏期に実習とリーダーになる素養を身につけるとともに、参加者との接し方や海洋実習における『わくわく感』をどのように伝えるかなどのコミュニケーション力も育成しているとのことであった。

(2) 実習前日のスタッフミーティング

実習がスムーズに進行するようスケジュール表に基づき、専任スタッフとボランティア・スタッフによる詳細な打ち合わせが行われていた。

(3) 学生ボランティア・スタッフへのヒヤリング

「実習におけるリーダーとして難しさやコミュニケーションの難しさはある」が「スタッフとの打ち合わせが助けとなり自信がついた」とのことであった。また、リーダーとしての活動が「就職活動に好影響があった」とし「複数の内定が得られた」とのことであった。

(4) 専任スタッフへのヒヤリング

「学生は、ボランティアとして協力してもらえることにより地域での活動にも積極的になる」との好影響がある一方で、「ボランティアとして活動するために夏期における練習やリーダーとしての素養を身につける機会も予算化していないことに、ある意味申し訳なさも感じている」とのことであった。しかし、学生ボランティアは、募集制としており「応募者の積極性を高く評価している」とのことであった。

2) 現地での実習内容

実習先企画の体験実習は、カヤック、サップ（スタンドアップパドルボート）、カナディアンカヌー、ヨット、ウィンドサーフィンによるものであった。また、ジャンボカヌーによって約800m沖合にある野々島巡りも行なった。それらの実習風景は、示した写真の通りである。その他にも導入プログラムとしてのコミュニケーションプログラムや講話などのプログラムも実施した。





③ 実習を行う上でのリスクマネジメント

海洋プログラムとして洋上で行う実習を複数設定している中でのリスクとその対応については、『基礎練習を重視していること』『プログラム中は常にスタッフと参加者との距離を近くすること（同じ種目の使用）』とともに、電動船舶による監視を行い』リスクの低減に努めているとのことであった。また、活動中に地震や津波などの災害が起きた場合を想定し、活動初日には避難訓練を実施するなど万全を期していた。さらに緊急時の対応として、診療所や総合病院および地元警察と連携できる体制を整えていた。なお、開所以来急を要する対応を行なった例はないとのことであった。

④ 参加学生の体験活動を通じた意識調査

本プロジェクトでは、参加学生が海洋プログラム等の体験活動を通して何を学び、何を感じるのかという点を把握するための意識調査を実施し、科目開設を検討する際の参考資料とした。ただし、今回の体験活動への参加学生は5名でありサンプル数も少ないため、あくまでも傾向のみを示す参考資料である。

調査結果の概要は以下の通りである。

1) 調査対象者の特性

表1及び表2は、調査対象者の特性を示したものである。参加学生はスポーツサイエンスコースに所属する2年生2名（男子）、3年生2名（男子）、4年生1名（女子）の5名であった。全員が過去の運動経験と野外活動経験もあり、野外活動についても好意的に捉えていることが分かる。

表1 対象者の特性(N=5)				表2 運動・スポーツ及び野外活動に対する嗜好(N=5)			
現在の運動習慣	N	過去の運動経験	N	運動・スポーツ	N	野外活動	N
週3日以上	2	ある	5	好き	4	好き	2
週1~2日程度	2	ない	0	どちらかといえば好き	1	どちらかといえば好き	3
月1~2日程度	0	野外活動の経験	N	どちらともいえない	0	どちらともいえない	0
年に数回程度	0	ある	5	どちらかといえば嫌い	0	どちらかといえば嫌い	0
全くやらない	1	ない	0	嫌い	0	嫌い	0

2) 体験活動参加前後の海洋プログラムへの期待度と満足度

表3は、海洋プログラムへの事前の期待度と事後の満足度を示したものである。サップ（スタンドアップパドルボード）、カナディアンカヌー、ヨット、ジャンボカヌーについては、事後の満足度が高い数値を示している。この中でもジャンボカヌーだけは、個人だけの力ではなく仲間の協力を必要とするものであり、プログラムとして取り入れる価値は高いものと判断できる。一方、唯一、満足度が下がっているウインドサーフィンについては、技術を習得するまでに時間を要することと、風や波の影響を受けやすいという特性もあり、達成感を得るところまでに至っていない可能性が高い。また、今回は天候に恵まれたこともあり、ヨットの満足度が高くなっているが、最も自然環境の影響を受けやすいのがヨットである。今回は体験ということもあり、1つのプログラムに取り組む時間も制限されていたため、今後は種目の選択やそれぞれの時間設定などに工夫が必要となる。

表3 プログラムの期待度と満足度(N=5)

種目	開始前期待度*	終了時満足度†
カヤック	4.2	4.2
サップ	4.8	5.0
カナディアンカヌー	3.4	4.0
ヨット	3.6	4.6
ウインドサーフィン	4.8	4.2
ジャンボカヌー	3.2	4.0

*:「1: 全く期待していない」から「5: 非常に期待している」の5段階評定尺度による平均値

†:「1: 全く満足していない」から「5: 非常に満足している」の5段階評定尺度による平均値

3) 実習参加に伴う費用

参加学生に対して、体験実習後に参加費用について質問をしたところ、交通費以外のプログラム指導費、宿泊費、食費を含めた実習費については、10,000円～15,000という回答であった。今回は1泊2日であったことを踏まえ、今後検討をする際の参考としたい。

4) 参加学生の感想・意見

参加学生の体験実習後の主な感想・意見についての自由回答は以下の通りである。また、全体としては、失敗しても一生懸命に取り組む姿勢や自分自身や仲間、そして自然と向き合う姿勢などにも気づきがあったようである。開講の際には、実習を通して、何を学び、習得させるのかという視点が非常に重要となるため、さらに検討を深める必要がある。また、履修登録方法などについても学生の声を参考にしていきたい。

- ・予想していたよりも楽しかった。普段できない体験ができる良い経験であったがもっと時間がほしい。(3年男子)
- ・日頃できない活動をたくさんできたので参加してよかった。1個のプログラムをもっと少しゆっくり長めにやりたかった。(2年男子)
- ・指導者の説明も分かりやすくてすごい楽しかったです。(2年男子)
- ・普段できないことを経験することができたのですごくよかった。最初「マリンスポーツ」と聞いたのでジェットスキーやダイビングをするのかと思っていたが、実際の種目を聞いて最初はインパクトが小さかった。しかし、ウィンドサーフィンやサップ系で実際にやってみてすごく楽しいものになった。30人くらいでやるとなってもまた違った面白いものになるのではないかと思う。(3年男子)
- ・抽選で落ちないのなら応募したい。プログラムは楽しかった。また来年の夏もマリンスポーツをしたいと思えました。(4年女子)

⑤ 科目を開講する場合の要件

スポーツサイエンスコースの社会科学系科目として Project based learning (PBL) 科目を開講するに際しては、以下の要件を満たす必要があると考える。

- 1) 社会科学系 PBL 科目開講の意義
- 2) 海洋スポーツの多様な楽しみ方を知るとともに、運営・指導の実際やリスクマネジメントについて学習できる内容を設定できるか。
- 3) 実習を通して生涯スポーツの指導・実践場面に応用できる資質を身につけさせる内容を設定できるか。
- 4) 開講時期と履修登録方法
- 5) 参加規模と実習に伴う費用
- 6) 開講責任者と評価法

4. Project based learning (PBL) 科目として開講する場合のシラバス案

開講を想定したシラバス案の1例を以下に示す。

① 講義概要

スポーツは、競技スポーツとして研究する対象だけではなく、文化的・政策的・経済的な観点から研究する対象となっている。このことは、スポーツの実践が人々の『心』や『身』に様々な好影響を及ぼすことが明らかになったことを受け、生涯スポーツとして国民一人ひとりが実践するだけではなく、個ではなく集団としての展開すなわち地域スポーツとして国民生活に根ざした展開をどのように行なっていくか課題となってきたことによる。そのため、国においては、総合型地域スポーツクラブ制度や21世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）などの政策提言が行われてきた。

本講義では、生涯スポーツや地域スポーツとして展開できる人材として必要な企画力や

コミュニケーション力、スポーツの実践力やスポーツ実施におけるリスクマネジメントなどに必要な知識と実践力などについて、自ら海洋スポーツを体験することを通して身につけることを目的とする。

② 到達目標

海洋スポーツを実践する企画力や技量を身につけている。

海洋スポーツを実践する上でのリスクとそのマネジメントについて説明できる。

③ 講義方法（案）

実習先での講義と海洋プログラムの実習により行う。

④ 授業外における予・復習等の指示（案）

実習先で行うことから、予習・復習の時間を確保した計画とする。

⑤ 系統的履修科目（案）

スポーツマネジメント論、スポーツ政策論、スポーツ医学

⑥ 成績評価の方法（案）

実習先での取り組み状況 40%、到達目標に関するレポート 60%

⑦ 講義計画（案）

講義計画は、以下の内容を盛り込み編成する。

1) 学内での事前指導

2) 海洋スポーツの実践力を身につける実習（基礎技能の習熟）

3) 海洋スポーツ実践におけるリスクマネジメントに関する講義と実習

4) 海洋スポーツ実習に関する実習先企画の講義

5) 海洋スポーツ実践の企画に関するグループディスカッション

6) 参加者が企画した海洋スポーツ実践の評価と課題に関するグループディスカッション

7) 事後指導・総合評価

⑧ その他

1) PBL 科目担当者は、少なくとも専任教員 1 名と実習先スタッフによる編成とする。

2) 宿泊を伴うことから、開講時期はサマーセッション期間とする。

3) 参加者数は、費用やリスクマネジメントなどの観点から、20 名程度が考えられる。

4) その他

宿泊と実習および現地への移動にかかる費用については、大学負担とするか、自己負担とするか、また両者とするかについて検討しなければならない。

以上